

「万葉集を読む」2 山上憶良

群馬県立女子大学教授 北川 和 秀

山上憶良年表

西暦	年号	天皇	執政	事項	年齢
六六〇	斉明六	斉明	中大兄	山上憶良、生まれる	1
六八七	持統元			(草壁皇子没)	28
六八八				山上憶良?紀伊行幸時の歌	29
六八九					30
六九〇					31
六九一					32
六九二			高市皇子		33
六九三				(藤原宮に遷都)	34
六九四					35
六九五					36
六九六					37
六九七	文武元		多治比島	(高市皇子没)	38
六九八		文武			39
六九九					40
七〇〇					41
七〇一	大宝元			無位山上憶良、遣唐少録。(大宝律令制定)	42
七〇二				(大宝律令を施行)	43
七〇三					44
七〇四	慶雲元				45
七〇五			石上麻呂	山上憶良、この年帰朝か	46
七〇六					47
七〇七					48
七〇八	和銅元				49
七〇九		元明		(柿本人麻呂、この頃没か)	50

計	16	9	8	6	5	3
59 (+6)	10	(+1)	12	1	33 (+4)	1
9 (+2)			1		8 (+2)	
1			1			
69 (+8)	10	(+1)	14	1	41 (+6)	1

*巻一と巻九の異伝歌は同一の歌で、いずれも川島皇子との作者異伝。

紀伊国に幸しし時の川島皇子の御作歌 或は云ふ、山上臣憶良の作

・白波の浜松が枝の手向け草幾代までにか年の経ぬらむ 一に云ふ、年は経にけむ

日本紀に曰はく、朱鳥四年庚寅の秋九月、天皇紀伊国に幸すといへり。

(万葉集一・三四)

山上の歌一首

・白波の浜松の木の手向け草幾代までにか年は経ぬらむ

右の一首は、或は曰はく、川島皇子の作りませる歌なりといへり。

(万葉集九・一七二六)

山上臣憶良大唐にある時、本郷を憶ひて作る歌

いざ子ども早く大和へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ(巻一・六三)

悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごと見せましものを(巻五・七九七)

妹が見し棟の花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なくに(巻五・七九八)

大野山霧立ち渡るわが嘆く息嘯の風に霧立ちわたる(巻五・七九九)

山上憶良臣、宴を罷る歌一首

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ(巻三・三三七)

子等を思ふ歌一首 序を并せたり

釈迦如来い、金口に正に説きたまはく、等しく衆生を思ふこと、羅羅の如しとのたまへり。又説きたまはく、愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへり。至極の大聖すら尚し子を愛しむる心あり。況むや世間の蒼生の、誰かは子を愛しびずあらめや。瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして憊はゆ 何処より 来りしものそ 眼交にもとな懸りて 安眠し寝さぬ(巻五・八〇二)

反歌

銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも(巻五・八〇三)

家に在りて母がとり見は慰むる心はあらまし死なば死ぬとも(巻五・八八九)
出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾を待たすらむ父母らはも(巻五・八九〇)
一世には二遍見えぬ父母を置きてや長く吾が別れなむ(巻五・八九一)

貧窮問答の歌一首 短歌を并せたり

風雑へ 雨降る夜の 雨雑へ 雪降る夜は 術もなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつつ
しろひ 糟湯酒 うち啜るひて 咳かひ 鼻びしびしに しかとあらぬ 鬚かき撫でて
我を除きて 人は在らじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り 布肩衣 有りの
ことごと 服襲へども 寒き夜すらを 我よりも 貧しき人の 父母は 飢え寒ゆらむ
妻子どもは 吟び泣くらむ 此の時は 如何にしつつか 汝が世は渡る
天地は 広しといへど 吾が為は 狭くやなりぬる 日月は 明しといへど 吾が為は
照りや給はぬ 人皆か 吾のみや然る わくらばに 人とはあるを 人並に 吾も作るを
綿も無き 布肩衣の海松の如 わわけさがれる 襦袢のみ 肩にうち懸け 伏廬の
曲廬の内に 直土に藁解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは足の方に 囲み居て
憂へ吟ひ 竈には 火気ふき立てず 甑には蜘蛛の巣懸きて 飯炊く 事も忘れて
雀鳥の 呻吟ひ居るに いとのかきて 短き物を 端截ると 云へるが如く 楚取る
里長が声は 寝屋戸まで 来立ち呼ばひぬ 斯くばかり 術無きものか 世間の道
(巻五・八九二)

山上憶良頓首謹みて上る

世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば(巻五・八九三)
術も無く苦しくあれば出で走り去ななと思へど児らに障りぬ(巻五・八九九)
富人の家の児どもの着る身無み腐し棄つらむ(巻五・九〇〇)

山上臣憶良の、秋の野の花を詠む二首

秋の野に咲きたる花を 指折りかき数ふれば七種の花 其の一(巻八・一五三七)
秋の花尾花葛花瞿麦の花女郎花また藤袴朝貌の花 其の二(巻八・一五三八)

山上臣憶良の沈き痾の時の歌一首

土やも空しかるべき万代に語り続くべき名は立てずして（巻六・九七八）

右の一首は、山上憶良臣の沈き痾の時に、藤原朝臣八束、河辺朝臣東人をして疾める状を問はしむ。ここに憶良臣、報の語已に畢り、須ありて涕を拭ひ、悲しび嘆きて、この歌を口吟ふ。

万葉集の諸本について

古点本

天曆五年（九五二）十月、村上天皇の命によって、撰和歌所が宮中の梨壺（昭陽舎）に置かれ、ここに清原元輔・紀時文・大中臣能宣・源順・坂上望城という五人の歌人が召された。この歌人達を、後世、「梨壺の五人」とよぶ。この五人は、万葉集の訓読と後撰和歌集の編纂とを行った。この折の万葉集の訓読を「古点」と呼ぶ。この系統の写本は今日に伝わらないようであるが、平安中期書写の桂本は、古点本の面影を伝えるとされる。

次点本

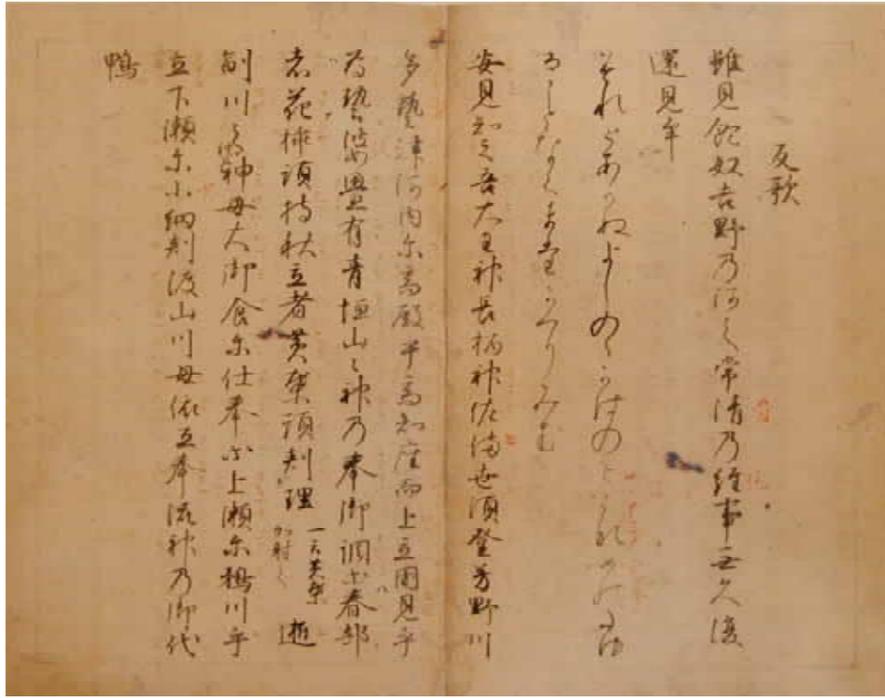
次項「新点本」以前の系統の本。平安時代の写本として、桂本、藍紙本、元暦校本、金沢本、天治本、類聚古集などが伝わり、いずれも貴重であるが、これらの中に完本はなく、桂本は巻四（全部ではない）しか伝わらず、最も多くの歌が残る類聚古集でも歌数は全体の八四％ほどである。しかし、近年、広瀬本という写本が発見された。書写年代は江戸時代ながら、次点本の中では現存する唯一の完本として貴重である。

新点本

鎌倉時代中期の僧、仙覚の本文校訂によって作成された本。仙覚は多くの次点本をつき合わせて本文校訂を行った。仙覚はその仕事になかなか満足できず、校訂作業は何次にもわたった。初期の頃の成果を伝える諸本を「寛元本」と呼ぶ。さらにより多くの諸本を校合対象として成った校訂本の系統を「文永本」と呼ぶ。「寛元」「文永」はともに鎌倉時代の元号である（寛元は一二四三年～一二四六年、文永は一二六四年～一二七四年）。

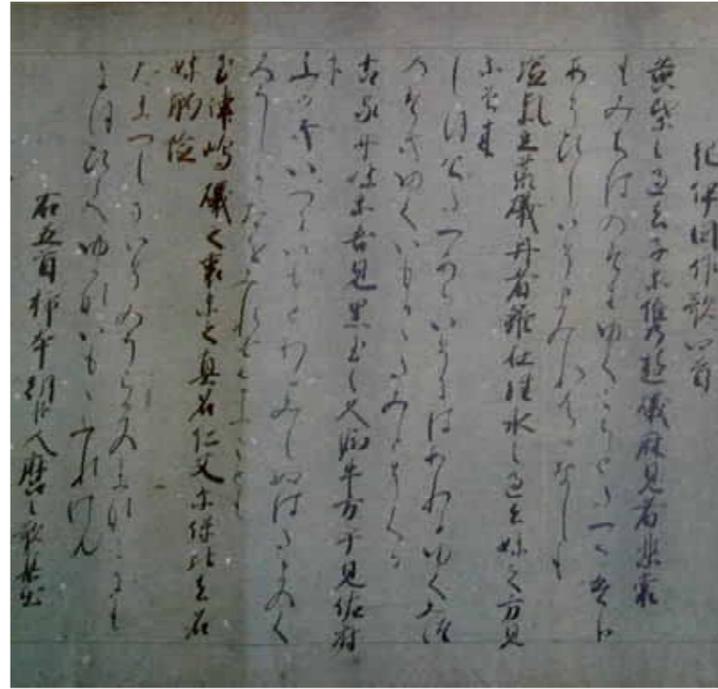
新点本の中では、文永本の方が、より多くの次点本を使用して作成された校訂本文であり、価値が高い。文永本の中で西本願寺本は鎌倉後期の書写で、仙覚からあまり時を隔てない写本であり、また次点本・新点本を通しての現存最古の完本として貴重である。

【元暦校本】



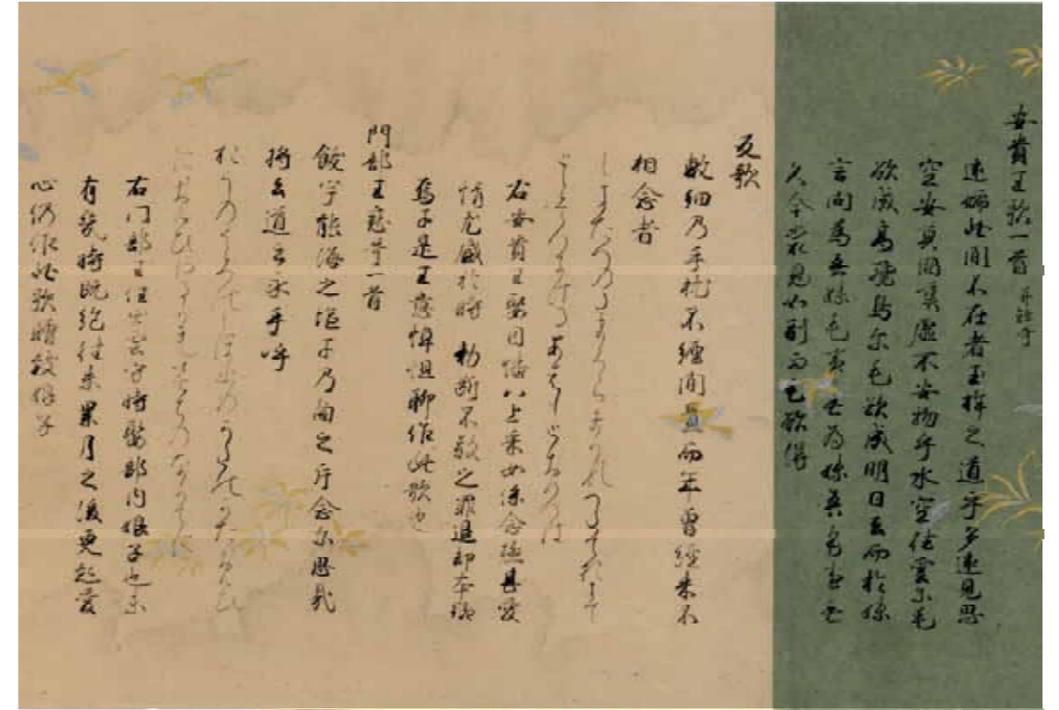
(二玄社刊『日本名跡叢刊』による)

【藍紙本】



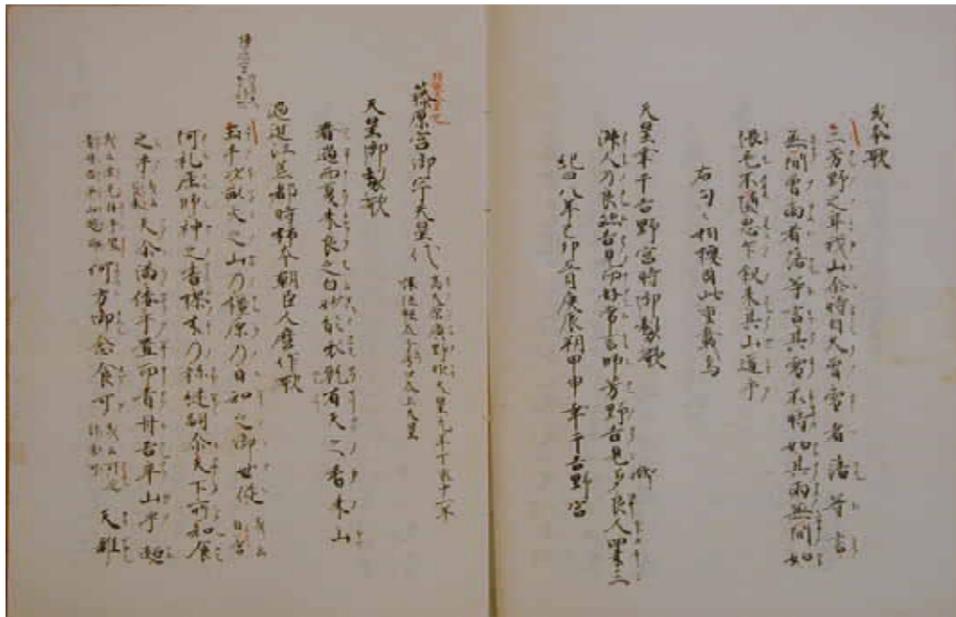
(二玄社刊『日本名跡叢刊』による)

【桂本】



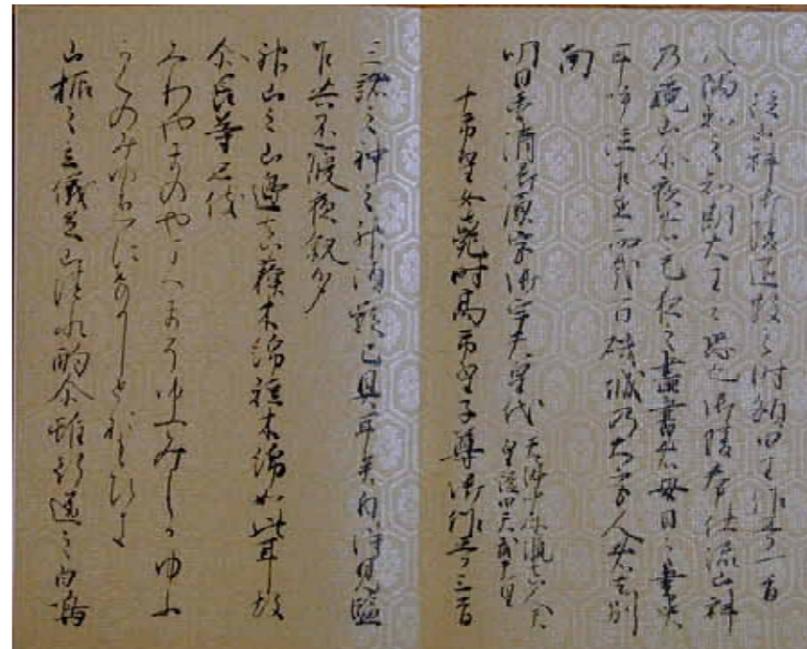
(集英社刊の複製による)

【西本願寺本】



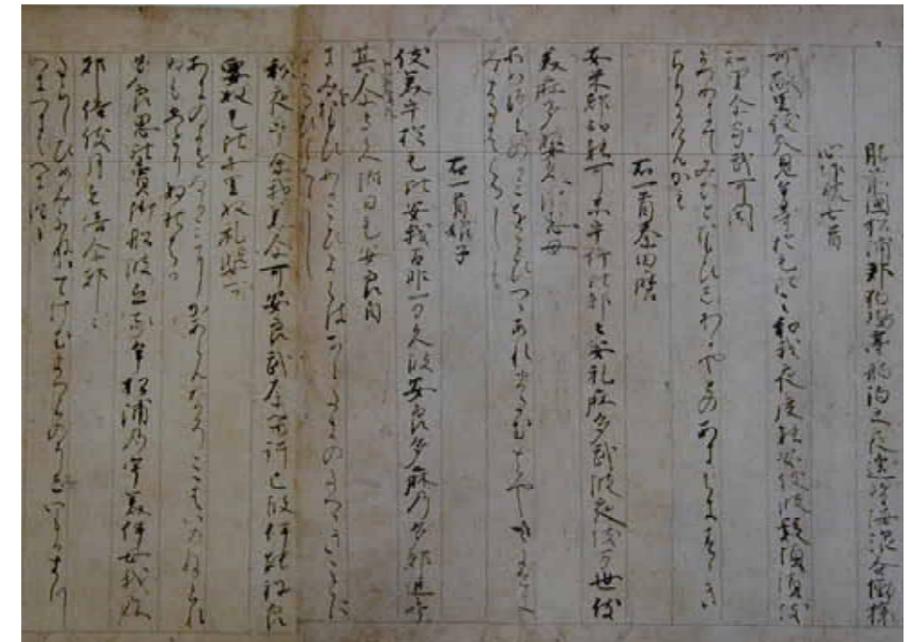
(竹柏会刊の複製による)

【金沢本】



(日本古典文学刊行会刊の複製による)

【天治本】



(勉誠社刊の複製による)